

元気に走り納め

ロードレース大会

十二月十八日に市体育協会などの主催でロードレース大会が開かれ、市内の中学生ら約二百六十人が参加。

この大会は、一〇時、五時、女子五時に分かれており、今回でそれぞれ二十三回、十九回、

自分たちが育てた

コイを国分川に

国分川をきれいにする会(岡田理博会長)では、浄化のシンボルであるコイを冬の間プールで子供たちに育ててもらおうと



元気に育て



師走の街を走り抜ける

十一回を数えます。参加者は師走の青空のもと、元氣いっぱい走り納めをしました。

法務局は一月から 第二・四土曜日が 休みとなりました

岡豊、国府、久礼田、長岡の四小学校にコイ二百匹ずつを託しました。

コイは高知市の野々村重利さん提供のもの。岡豊小学校では一、二年生百五十人がプールにコイを放ち、元気に泳ぎはじめた姿に歓声を上げていました。このコイは今年の三月ごろまで子供たちが世話をし、国分川に放流することになっています。

同和教育シリーズ

同和教育は、まず家庭から

市内の小学校六年生のある学級で同和学習をした後、そのことについて児童が家族と話をしたところ「同和問題は、うちらとは関係ない。」そんな問題は、学校だけにしておき」と、父は言いました。私はその言葉を聞いてたいへん腹が立ちました。私たちは、みんなが幸せになるために、学校で部落差別をはじめいろいろな差別をなくしていこうといっしょうけんめいがんばっているのに、大人はなぜこの問題に真剣に取り組もうとしないのでしょうか。私は、まず自分の親たちから間違った考え方を正していきたい」と、訴えています。

同和問題に対する私たちの意識はどうでしょうか。昭和五十六年度に県が実施した意識調査の結果では「同和地区のことをいつごろ知らされましたか。」に対して、高校ごろまでに約八割の者が既に知らされていることがわかります。次に「だれから知らされましたか。」に対して、半数以上の者が、父母や家族、学校の友だち、近所の人などから知らされ、学校の授業からというのがわずかしかなかった。

続いて「初めて聞いたときの内容」では、正しく知らされた内容はごく少なく、ほとんどの者が、同和地区の人は「こわい、おおせいで押しかける」「人種が違う」「職業が違う」等の間違った形で知らされています。

これと同じような調査を市内でも小・中学生の保護者に対して行っていますが、だいたい同じ結果が出ています。同和問題は、早い時期に正しく理解させることと、前述の話の子供の例のように家庭での教育の在り方が重要視されます。

市内のある婦人は「私は同和問題に対して初めは無関心でした。小学校のPTA同和教育推進員になり、会合への参加を保護者等と呼びかけていくなかで「他の会には行かない。」等、無関

心、拒否反応者が多いことに気づきました。これは少し前までの自分の姿でもありました。そこで、まず自分自身が学習を深めていこうと決心し、できるかぎり同和合宿など子供の学習へ積極的に参加し、学校で学んでいることを家庭でこわさないようにながらばっています。おかげさまで今では、反骨精神の長男も人の痛みのわかる人間に成長しつつあります。これからも子供とともに自分の課題として同和教育に取り組んで、子供の親として、また一人の人間として恥ずかしくない人生を歩みたいと思います。」と、語っています。

「子供は親の背を見て育つ」のです。言葉でいくら人間の尊厳や人権の尊重を教えたとしても、人間として正しく、たくましく生き抜く親の生き方の中に、それを納得させるものがなくてはならないと考えます。親自身も人間尊重の精神に徹し、正しいものの見方、考え方を常に身につけるように努力することがたいせつではないでしょうか。

親自身がしっかり学習して子供とともに学んでほしいと思います。

「他の会には行かない。」等、無関